

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520468
 研究課題名（和文） 中国語または韓国語を母語とする日本語学習者の敬語能力に関する
 実証的研究
 研究課題名（英文） An experimental study concerning the competence of Japanese
 honorific expression by native Chinese and Korean speakers
 learning Japanese
 研究代表者
 宮岡 弥生 (MIYAOKA YAYOI)
 広島経済大学・経済学部・准教授
 研究者番号：10351975

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国語または韓国語を母語とする日本語学習者が、日本語の敬語をどのように学習するのが効果的なのかについて、考察することを試みた。まず、基準となるデータを収集するため、日本語母語話者に対して敬語聴解実験を行ったところ、謙譲語のほうが尊敬語よりも難しいとは言えない結果が得られた。また、中国語母語話者に対して敬語テストと日本語語彙・文法テストを行った結果、敬語の特定形（「いらっしゃる」「伺う」など）の習得が非特定形（「お～になる」「お～する」など）の習得の基盤になっており、日本語学習者はまず敬語の特定形を習得して敬語の使用に慣れることが、非特定形の習得につながるということが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The present study investigate the effective method for teaching Japanese honorific expressions to native Chinese and Korean speakers learning Japanese. Prior to testing Japanese learners, an experiment for listening comprehension of Japanese honorifics expressions was conducted to native Japanese speakers to establish the baseline. On the contrary to our assumption, the results showed that it is not easily generalized the notion that humble expressions were more difficult than exalted expressions. The questionnaire concerning Japanese honorific expressions, vocabulary and grammar was conducted to native Chinese speakers learning Japanese, of which results suggested that the knowledge of the specific verbs of Japanese honorifics (e.g., 'irashharu, ukagau'), rather than the knowledge of non-specific verbs (e.g., 'o~ninaru, o~suru') is base for acquisition. Therefore, to acquire Japanese honorific expressions, it is better first to teach specific verbs of Japanese honorifics to Japanese learners.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：敬語、日本語教育、第二言語教育

1. 研究開始当初の背景

外国人が日本語を学習する際にもっとも難しいと言われているのが、敬語である。日本語学習者の中には敬語を学習する必要はないという意見を持つものもいるが、特に商業敬語が簡素化される気配が全くない日本社会の現状に鑑みて、それは妥当とは言えない。外国人であっても、銀行やデパート、交通機関などのあらゆる場面において、敬語を多用したアナウンスなどに遭遇する。したがって、日本語教育では、外国人に対する敬語指導を重視しなくてはならない。

2. 研究の目的

本研究では、日本語学習者に対する効果的な敬語教育の方法を確立するため、日本語学習者の中でも特に割合の高い中国語母語話者と韓国語母語話者の敬語能力を詳細に説明することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究ではまず、統制群としての日本語母語話者の敬語理解過程を明らかにするため、聴覚提示による反応時間測定実験を行った。次に、日本語学習者の敬語知識が日本語の語彙や文法の知識とどのような関係にあるのかを解明するため、質問紙形式による敬語テストと日本語語彙・文法テストを実施した。

(1) 聴覚提示による反応時間測定実験

①目的

近年、日本語の敬語の誤用が増加している。例えば、店員が客に対して「あちらで伺ってください」と言うような誤用は、謙譲語の機能を正しく理解していないための誤りである(菊地, 1997)。また、駅員が乗客に対して「お乗り換えしてください」と言うようなものは、謙譲語の語形に尊敬語の機能をもたせて使っている誤用である(菊地, 1997)。

このように、謙譲語の機能と語形を正しく理解していないことによる誤用が目につくことから、尊敬語と謙譲語とでは、謙譲語のほうが難易度が高いのではないかと予想される。しかし、これまで、実証的な方法で、尊敬語と謙譲語の難易度を直接比較した研究は未見である。そこで本研究では、尊敬語と謙譲語を直接比較できるように統制した刺激を用いて、聴覚提示による正誤判断課題の反応時間測定実験を行い、両者の難易度を比較した。

②実験

尊敬語と謙譲語を直接比較するために、尊

敬語と謙譲語の基本動詞の種類、敬語の特定形をもつ動詞ともたない動詞の数など、刺激文を統制した。

刺激文はすべて、同じ女性の音声で録音した。本研究では、聴覚提示による反応時間測定実験の方法を用いたため、正文(肯定反応)と誤文(否定反応)のそれぞれで、尊敬語を含む文と謙譲語を含む文の発話持続時間がほぼ同じになるように調整した。

刺激文は、正文が54文、誤文が36文、ダミー文が10文で、ちょうど100文である。これらをランダムに聴覚的に提示して、聴覚提示の始まりから被験者が正誤判断をするまでの時間と、その判断の正誤を記録した。被験者にはヘッドホンをつけ、ヘッドホンから聞こえてくる文が正しいかどうかの判断をコンピュータのキー押して行うように指示した。実験プログラムとしては、アメリカのアリゾナ大学のジョナサン・フォスターが開発したDMDXを使用した。

実験は、広島県在住で日本語を母語とする大学生と大学院生の計24名(女性が19名、男性が5名)に対して行った。

③結果と考察

本研究では、尊敬語と謙譲語を比較すると謙譲語のほうが難しいのではないかという仮説のもとに、聴覚提示された敬語を含む文の正誤判断課題実験を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

第一に、仮説に反して、謙譲語のほうが尊敬語よりも難しいとは言えない結果が得られた。正しく肯定すべき刺激文(正文)の場合には謙譲語を含む文、また、正しく否定すべき刺激文(誤文)の場合には、謙譲語のかわりに尊敬語を使用している誤文のほうが、反応時間が短かった。これらは共に、主語が「私」または「私の家族」で始まり、述部に謙譲語が要求される文である。誤答率を見ても、正文においては謙譲語と尊敬語の間に有意な差は見られなかったが、誤文においては謙譲語のかわりに尊敬語を使用している誤文のほうが誤答率が低く、反応時間と同様の傾向を示していた。この結果は、一見すると、謙譲語のほうが尊敬語よりも難しいという一般的な認識と異なっているように思われる。

しかし、本研究が聴覚実験であるということとを考慮に入れると、妥当な結果であると言える。従来の敬語研究においては、主に質問紙による調査が行われている。これらの調査は視覚提示によるものであるため、被験者は刺激文の主語と敬語動詞を何度も見比べて

照合することができる。一方、本研究で採用した聴覚提示実験においては、被験者は敬語動詞を聞いたあと、もう一度主語と敬語動詞を見比べて両者の整合性を判断することはできない。そのため、主語を聞くと同時にその先を予測する即時処理が、視覚提示の場合よりも促進されるのだと考えられる。このような場合、敬語の「人称暗示」的機能(菊池, 1997)が、敬語表現の予測に影響を与えていると考えられる。

この「人称暗示」的機能とは、敬語を主語と結び付けて捉えたもので、私や私の家族といった話手側の領域の人物が主語のときには謙譲語を使い、相手側の領域の人物が主語のときには尊敬語を使うという敬語の働きを指している。例えば、店で大きな品物を買ったとき、店員が「お持ちしますか」と言えば「私が持って行きましょうか(あとで配達しましょうか)」の意となり、「お持ちになりますか」と言えば、「あなたが持って帰りますか」の意となる(菊池, 1997)。この「人称暗示」的機能が敬語に備わっていることによって、主語が明示されていない場合には敬語から主語をボトムアップで類推することができる。逆に、本研究の刺激文のように主語が明示されている場合には、主語と敬語の共起制限から後続の敬語が予測できる。したがって、本研究では、敬語の「人称暗示」的機能が主語から動詞へのトップダウンの形で働き、被験者は主語を聞いた時点で後続の敬語表現を予測しながら課題を行ったのだと考えられる。そして、主語から敬語表現を予測する場合、主語が「私」または「私の家族」のような話手側の領域の人物、つまり敬語的一人称のほう、後続の謙譲語の予測が容易なのと思われる。

この理由として、主語が敬語的一人称の場合には、本研究の刺激文のように主語が敬語的三人称の場合よりも、主語と補語の間の人間関係を把握しやすいのだと考えられる。つまり、敬語的一人称の場合には主語のバリエーションが「私/私の家族」という一種類に限定されるため、主語と補語との組み合わせの数は補語のバリエーションのみによって決まる。これに対して、主語が三人称の場合には、主語のバリエーションは設定する人物の属性によってさまざまであるため、主語と補語との組み合わせも「主語のバリエーション」×「補語のバリエーション」となり、多様性が増す。このように、主語が入力された時点での、後続する表現の予測可能性の多寡が、予測の難易度に、ひいては敬語表現の正誤判断の難易度に影響しているのだと考えられるであろう。

後続する言語表現の予測に関しては、文を読む場合と聞く場合の両面から、これまでにさまざまな研究がなされてきた(寺村, 1987;

大野他, 1996; 杉山他, 1997; 石黒, 2001)。これらと同様に、「人称暗示」的機能をもつ敬語も、後続の表現が予測しやすい言語表現であると言える。しかし、これは、敬語の語形と機能について、使用者が正しい認識を持っているということが前提である。菊池(1997)が指摘するように、尊敬語と謙譲語の区別が不分明になっていけば、「敬語使用の根本をなすともいえる<人称暗示>的機能の成立が保証されなくなり、コミュニケーションに支障をきたしかねなくなる」(菊池, 1997)。敬語の「人称暗示」的機能が後続の敬語表現の予測に影響している可能性があるという本研究の結果は、敬語の語形と機能を正しく認識することの重要性をも示唆していると言えるであろう。

第二に、本研究では、正しい敬語を含む文の分析において、正誤判断までの時間は尊敬語よりも謙譲語を含む文のほうが有意に早い、最終的な判断である誤答率で見た場合には、本実験で使用した尊敬語を含む文と謙譲語を含む文の難易度は同じであるという結果が得られた。このことから、厳密に難易度をはかる場合には、質問紙調査よりも反応時間の測定のほうが適切であることが示唆された。

[引用文献]

- 石黒圭(2001)「句の説明の予測一予測の読みの一側面」『一橋論叢』第126巻第3号, 276-289
- 大野早苗・堀和佳子・八若寿美子・池上摩希子・内田安伊子・郭末任・許夏珮・長友和彦(1996)「予測文法研究一後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について」、『日本語教育』91号, 73-83
- 菊池康人(1997)『敬語』, 講談社
- 杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子(1997)「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」、『日本語教育』92号, 36-47
- 寺村秀夫(1987)「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」、『日本語学』第6巻第3号, 56-68, 明治書院

(2)敬語テストと日本語能力テストー中国語母語話者の場合ー

①目的

日本語学習者が敬語を使いこなせるようになるための第一段階として、まず、尊敬語や謙譲語にはどのような語形があり、正しい語形は何であるかという、敬語の正しい表現形式を習得する必要がある。敬語には、「おっしゃる」などの特定形と、基本動詞に「お～になる」などを付加する非特定形の2種類があるが、特定形は、基本動詞とは別に敬語

動詞を覚えなくてはならないため、非特定形よりも習得の際の負担が大きいのではないかと考えられがちである。しかし、反対に、「おっしゃる」などの特定形は日常生活において聞き取る頻度が高いため、習得の際の負担はそれほど重くはないのではないかと推測される。また、敬語の正しい表現形式の習得は、日本語の基本的な語彙や文法の知識が基盤になっていると考えられる。そこで本研究では、敬語の「特定形の習得」、「非特定形の習得」、「文法の知識」、「語彙の知識」の因果関係について検討した。

②調査

2008年6月に、中国・武漢市の大学で日本語を学習している1年生68名、2年生75名、3年生67名の計215名に対して、すべて質問紙による敬語習得テスト(42問)、日本語語彙テスト(36問)、日本語文法テスト(36問)を行った(全1問1点)。敬語テストは尊敬語と謙譲語の2種類の問題で構成され、さらにそれらは敬語の特定形と非特定形に分かれている。敬語テストの形式は、敬語を使わなくてはならない状況を設定し、適切な敬語を6つの選択肢から選んでもらうというものである。各テストのクロンバックの信頼度係数は、敬語が0.950、語彙が0.876、文法が0.794と、いずれも高かった。

③結果

敬語の「特定形の習得」、敬語の「非特定形の習得」、「文法の知識」、「語彙の知識」の4つの潜在変数について因果関係モデルを仮定し、そのモデルがデータと適合するかどうかについてSEM(構造方程式モデリング)の手法で検討した。その結果(図を参照)、本研究のモデルはデータと適合していた [$\chi^2=43.041, p=.074, n.s, GFI=.960,$

AGFI=.928, CFI=.990, RMSEA=.043]。文法の知識(形態素変化、局所依存、構造の複雑性の観測変数で構成)と語彙の知識(名詞、形容詞、動詞の観測変数で構成)は高い相関を示した($r=0.89$)。文法(パス係数=.50)と語彙(パス係数=.38)の双方の知識から敬語の特定形の習得に対して有意な因果関係がみられたが、特に文法からの影響が強かった。さらに、敬語の特定形の習得は、非特定形の習得に対して非常に強い影響を及ぼしていることが明らかになった(パス係数=.99)。このモデル以外に、非特定形から特定形への因果関係も仮定して分析を試みたが、分散が負になり適合度が算出されず、そのモデルは不適切であると考えられたため採用しなかった。

④考察

本研究では、次の2つのことを明らかにした。

まず第1に、敬語の特定形の習得が非特定形の習得に強い影響を与えているということである。中国語を母語とする日本語学習者の敬語習得においては、敬語の特定形の習得が基盤となって非特定形へと進んでいる可能性がある。この原因として、特定形のほうが非特定形よりも若干、教授順序が早い場合があることと、「おっしゃる」などの特定形は「言う」のような基本的な動作を表すものが多いため、使用頻度が非特定形に比べると高いことが挙げられるであろう。

また、別の原因として形態処理上の問題も考えられる。特定形は基本動詞とは別に動詞を覚えなくてはならないが、動詞としては単一である。一方、非特定形は基本動詞に「お～になる」のような別の語形を付加させて作らなくてはならないため、その形態的な処理が難しいと考えられる。文法テストの結果を見ても、統計的に直接比較はできないものの、

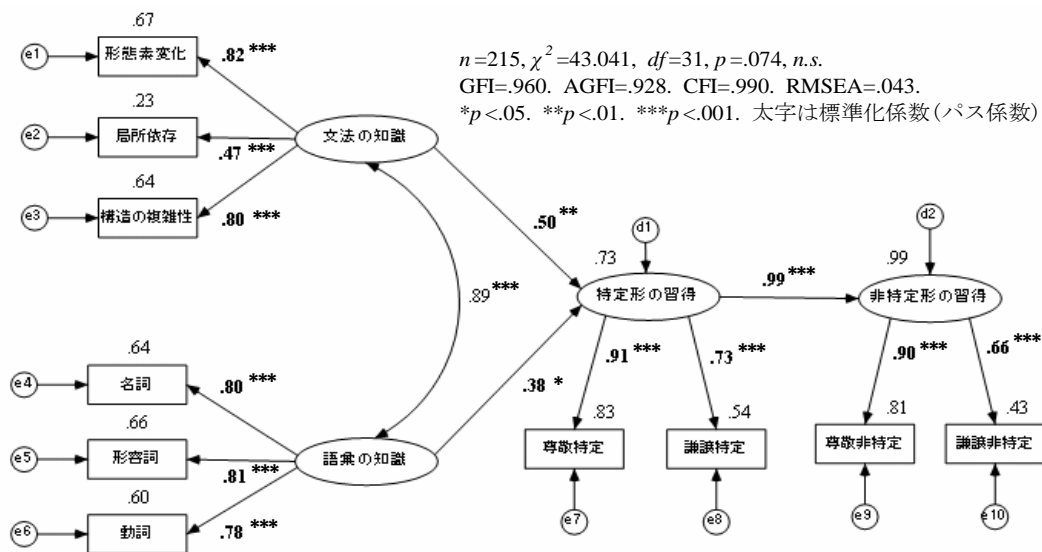


図 文法と語彙の知識から敬語の特定形・非特定形の習得への因果関係モデル

動詞の活用や接続に関する形態素変化の正答率がかなり低かったことから、本研究の調査協力者である日本語学習者にとって、動詞の形態素変化などは難しいのだと思われる。以上のことから、特定形の習得が非特定形の習得の基盤となっていることの理由として、特定形のほうが形態上の処理単純であることも考えられる。

以上のように、学習者自身の敬語の習得が特定形を基盤として非特定形へと進んでいくことから、学習者はまず特定形をしっかりと習得して敬語の使い方に慣れ、その上で非特定形を学ぶことが、敬語の効果的な習得につながると言えるであろう。

第2に、語彙と文法の双方の知識が敬語の特定形と非特定形の習得に影響していることが分かった。日本語の敬語が「文法論的」であるか「語彙論的」であるかについては、これまでさまざまに議論されてきた(滝浦, 2005)。本研究で実施した調査は日本語母語話者ではなく日本語学習者を対象としたものであり、その学習者も中国語母語話者のみと限定的である。そのような限られた条件の下で導き出されたものとして、敬語の習得に対しては語彙と文法の知識の双方が影響しており、その影響力は若干、文法のほうが語彙よりも強いという結果が得られた。

[引用文献]

滝浦真人(2005)『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討』, 大修館書店

(3)敬語テストと日本語能力テスト—韓国語母語話者の場合—

平成21年9月、韓国において、日本語を学習している韓国人大学生90名に対して、中国語を母語とする日本語学習者に対して実施したのと同じ記述式の敬語テストと日本語能力テストを行った。平成22年5月末現在、データの集計と分析を実施中である。韓国語母語話者のデータは、日本語能力テストの得点をもとにして中国語母語話者のデータとペアマッチサンプリングを行い、敬語知識の習得の度合いについて比較検討する予定である。

4. 研究成果

本研究では、主に以下の3点が明らかになった。

- (1) 日本語母語話者に対して敬語の聴解実験を行ったところ、正文の反応時間は謙讓語のほうが尊敬語よりも有意に早く、従来言われているように謙讓語のほうが尊敬語よりも難しいとは言えない結果が得られた。正文の誤答率は尊敬語と謙讓語で同じであった。今回の実験が聴覚提示によるものであったことを考

慮に入れると、文頭を聞いた直後から始まる予測の機能を詳細に解明することが、敬語理解過程の解明につながると考えられる。

- (2) 中国語を母語とする日本語学習者に対して敬語テストと日本語語彙テスト、日本語文法テストを実施し、その結果をSEM(構造方程式モデリング)の手法で検討した。その結果、中国語を母語とする日本語学習者の場合には、敬語の特定形(「いらっしゃる」「伺う」など)の習得が敬語の非特定形(「お~になる」「お~する」など)の習得の基盤になっていることが明らかになった。
- (3) 中国語を母語とする日本語学習者の場合には、敬語の習得に対して語彙と文法の知識の双方が影響しており、その影響力は若干、文法のほうが語彙よりも強いという結果が得られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① Tamaoka, K., Lim, H., Miyaoka, Y., & Kiyama, S. (2010) Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of politeness among young Japanese and Koreans *Journal of Asian Pacific Communication* 20. 23-45. 査読有り
- ② 宮岡弥生 (2009) 聴覚提示された尊敬および謙讓表現の理解—日本語母語話者の場合—. 広島経済大学研究論集, 32(2), 11-20. 査読無し (<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/bitstream/harp/5128/1/kenkyu1980320202.pdf>)
- ③ 宮岡弥生・玉岡 賀津雄・林炫情・池映任 (2009) 韓国語を母語とする日本語学習者による漢字の書き取りに関する研究—学習者の語彙力と漢字が含まれる単語の使用頻度の影響—. *日本語科学*, 24, 105-11. 査読有り
- ④ 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生 (2008) 日本語と韓国語の第三者待遇表現—聞き手の違いが他称詞と述語待遇選択に及ぼす影響. *山口県立大学国際文化学部紀要*, 14, 56-70. 査読無し

⑤ 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子 (2008) 中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理—同形類義語と同形異義語を対象に—. 日本語科学, 23, 81-94. 査読有り

⑥ 玉岡賀津雄・林炫情・池映任・柴崎秀子 (2008) 韓国語母語話者による和製英語の理解. レキシコンフォーラム, 4, 195-222. 査読有り

[学会発表] (計 12 件)

① 孫猛・小泉政利・玉岡賀津雄・宮岡弥生. 中国人日本語学習者のテイルの形と意味の習得における動詞の種類, 活用および文脈の影響. 第二言語習得研究会第 20 回全国大会. 2009 年 12 月 13 日. 南山大学

② 木山幸子・玉岡賀津雄・趙萍. 中国人日本語学習者による語用論的能力の習得に関わる知識の因果関係の検討. 第二言語習得研究会 (JASLA) 第二言語習得研究会第 20 回全国大会. 2009 年 12 月 13 日. 南山大学

③ Tamaoka, K., Asano, M., Miyaoka, Y., & Yokosawa, K. Pre- and post-head phrasal parsing of canonical and scrambled Japanese active sentences measured by eye-tracking method. 日本言語学会第 138 回大会. 2009 年 6 月 20 日. 神田外語大学

④ 宮岡弥生・玉岡賀津雄・小泉政利・孫猛. 敬語の特定形・非特定形の習得に対する語彙および文法の知識の影響. 2009 年度日本語教育学会春季大会. 2009 年 5 月 24 日. 明海大学

⑤ 宮岡弥生・玉岡賀津雄・林炫情・金秀眞. オノマトペと動詞の共起表現の理解と語彙知識との因果関係—韓国語を母語とする日本語学習者の場合—. 日本語教育学会 2008 年度春季大会. 2008 年 5 月 25 日. 首都大学東京

⑥ 玉岡賀津雄・木山幸子・宮岡弥生. ヒトの言語産出とコーパスの頻度はどのくらい類似しているか. 日本言語学会第 136 回大会. 2008 年 6 月 21 日. 学習院大学

⑦ Tamaoka, K., Miyaoka, Y., Wu, Y., & Duan, X. Causal relations between idiomatic/onomatopoeic understanding and lexical knowledge among native Chinese speakers learning Japanese.

言語科学会第 10 回年次国際大会. 2008 年 7 月 13 日. 静岡県立大学

⑧ Tamaoka, K., Lim, H., & Miyaoka, Y. Effects of gender-identity and gender-congruence on levels of response politeness. 日本語用論学会第 10 回大会. 2007 年 12 月 9 日. 関西外国語大学

⑨ Tamaoka, K., Miyaoka, Y., Lim, H., Kim, S., & Sakai, H. Differences in discourse comprehension strategies for L2 (second language) Japanese as employed by pair-matched L1 (first language) Chinese and Korean Speakers. 日本言語学会第 135 回大会. 2007 年 11 月 25 日. 信州大学

⑩ 林炫情・玉岡賀津雄・宮岡弥生・金秀眞. 丁寧度の判定に関わるポライトネスストラテジーの要因についての階層的分析. 韓国日本文化学会第 29 回学術大会. 2007 年 10 月

⑪ 玉岡賀津雄・宮岡弥生・福田倫子・母育新. 中国語を母語とする日本語学習者の語彙と文法の知識が聴解・読解および談話能力に及ぼす影響. 2007 年度日本語教育学会秋季大会. 2007 年 10 月 7 日. 龍谷大学

⑫ 玉岡賀津雄・宮岡弥生・邱學瑾. 音声提示された正順・かき混ぜ語順の単文理解が長文の聴解に及ぼす影響. 2007 年度日本語教育学会春季大会. 2007 年 5 月 27 日. 桜美林大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮岡 弥生 (MIYAOKA YAYOI)
広島経済大学・経済学部・准教授
研究者番号: 10351975

(2) 研究分担者

玉岡 賀津雄 (TAMAOKA KATSUO)
名古屋大学・
大学院国際言語文化研究科・教授
研究者番号: 70227263

(3) 研究協力者

林 炫情 (LIM HYUNJUNG)
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号: 30412290